

フランス語の半過去と日本語のテイル—telic な意味の半過去を巡って

岸彩子

1. はじめに

telic な意味の英語の単純過去形(ex. *He came*)を翻訳する場合、フランス語では通常単純過去 *Il vint*、または複合過去 *il est venu* が用いられ、atelic な意味の過去進行形(ex. *She was knitting*)には半過去(*Elle tricottait*) が対応する。日本語訳の場合にも、タ / テイタに同様の区別が見られる。

だが、(1a)では、原文(1b)で単純過去形 *died* で表されている telic な事態が、半過去で訳されている。

(1) a. Je me rappelai alors avoir laissé le testament sur mon bureau. Je le pris, scellai l'enveloppe, écrivis ce qu'il fallait dessus et la déposai dans mon coffre. J'en arrive maintenant au point crucial de mon histoire. **Deux mois plus tard, Simon Clode mourait.** Je ne m'étendrai pas outre mesure, je m'en tiendrai aux faits: quand on ouvrit l'enveloppe scellée, elle ne contenait plus qu'une feuille de papier blanc.

(Christie, *Miss Marple au club du mardi*, p.48)

b. I then remembered that I had left the will lying on the table. I took it, sealed the envelope, and wrote on it and put it away in the safe. Now I come to the crux of my story. **Two months later Mr Simon Clode died.** I will not go into longwinded discussions, I will just state the bare facts. When the sealed envelope containing the will was opened it was found to contain a sheet of blank paper.

(Christie, *The Thirteen Problems*, p.100)

c. それからわたしは遺言状が机の上に置きっぱなしだったことを思い出し、それをとって封をし、表書きをして金庫の中にしたのでした。さて、ここからが話のかんじん要なんですよ。二ヶ月後にサイモン・クロードは亡くなりました。くどくど言うのはやめて、わたしはありのままの事実だけを申し上げます。遺言状の入っている封印された例の封筒をあけたら、中にはただ一枚の白紙しか入っていないではありませんか。

(『ミス・マーブルと13の謎』, p.98)

なぜここでは、telic な事態が単純過去ではなく、半過去で表されているのか。

(1a)は「時間表現 (*plus tard*) + 半過去」の形をとっており、これは、Imparfait narratif (Bres1999, Berthonneau et Kleiber 1999, Lebeau 2005 他)と同じ形である。Imparfait narratif (以下 INar と略)は、(2a)、(2b)の下線部のような、語りの文脈に現れ、次のような特徴を持つとされる半過去である。¹⁾ ①単純過去と交換可能、②telic な動詞がより多く用いられる、③時の副詞句が前置されることが多い、④物語を継起的に進める。²⁾

(2) a. Comme elle avait été à l'Opéra, une nuit d'hiver, elle rentra toute frissonnante de froid. Le lendemain elle toussait. Huit jours plus tard, elle mourait d'une fluxion de poitrine. (Maupassant, *Les Bijoux*, p.766)

b. Elle y était à peine installée que les lumières s'éteignaient et qu'un projecteur éclairait la pièce où s'élançait Betty Bruce. (Simenon, *Maigret au Picratt's*, p.88)

(1a) の半過去は単純過去との交換、telic な動詞などの特徴を満たしており、INar であるように見える。

(3) Deux mois plus tard, Simon Clode *mourut*.

(4) a. Huit jours plus tard, elle *mourut* d'une fluxion de poitrine. (cf. (2a))

b. Elle y était à peine installée que les lumières *s'éteignirent* et qu'un projecteur *éclaira* la pièce. (cf. (2b))

だが、意味効果の点ではずれが生じる。INar の意味効果としては次のようなものが挙げられている。INar は「錆びたカメラで撮られたような」(Le Goffic1995)、「スライドのような表し方」(De Vogüé1999) であり、また「静止画、あるいはスローモーションでえがきだすような」(渡邊 2014) 表し方である。「何らかの解決」(Berthonneau et Kleiber1999)、「エピソードの最後の要素」(Berthonneau et Kleiber1999) を表し、「重大な結果」(渡邊 2014) という意味効果をもたらす。

(1a) の半過去には、上記の効果はないように思われる。まず、「エピソードの最後の要素」、「重大な結果」という意味効果については、次のことが確認される。(1a) のエピソードにおいて、最後の要素、結末は「サイモンの死」ではなく、その次の「白紙だった」である。このエピソードの最も重要な点も白紙だったことで、サイモンの死ではない。サイモンの死は「かんじん要」な点の一部ではあるがまだ始まりにすぎず、サイモンが死んだことを述べた後、語り手は「くどくど言うのは止めて」と言っている。重大な結果、中心となる出来事はこの後に語られるのである。

また、語り手が頻繁に登場するのも INar とは異なる点である。この部分の je は、登場人物としての je と語り手としての je の二種類あるが、問題の半過去は語り手を指す je に挟まれている。

そして、「錆びたカメラで撮られたような」、「スライドのような」はいずれもその場での知覚の様態をあらわす表現だが、(1a)の半過去が事態の知覚を喚起する表現であるかは疑問である。

このような違いがある (1a) は、ではどのような半過去なのか。INar でないとしても、単純過去と交換可能に見える半過去という点は変わらない。なぜ(1a)では半過去が用いられているのか。

また(1)の日本語訳についても疑問点がある。問題の箇所は、日本語訳(1c)ではタ形で「サイモン・クロードは亡くなりました」と訳されている。原文(1b)では単純過去形なのでこれは順当な訳である。だがこの文脈ではタだけではなく、(5)のようにテイルも可能である。本来過去を表さないテイルがなぜここで使われ得るのか。これらタ、テイルの違いはあるのか。あるならどのような違いか。³⁾

(5) ニヶ月後にサイモン・クロードは {亡くなりました。 / 亡くなっています。}

本稿では、(1a)の半過去は、タと交換可能とされる過去の事態を表すテイルと同様の、他の事象を考慮に入れた述べ方であると考え。このことは、ある文を解釈するときどこまでを考慮に入れるかという、領域 (Recanati1996) の観点から捉えることによって明らかになる。

2. ル / テイル (発話現在)

この章ではテイルの領域について考察する。まず発話現時の事態を表すテイルとルを比較し、ルが事態のみを述べるのに対し、テイルは他の情報を鑑みた上で、事態を述べるものであることを見る。

通常、発話現時「今ここ」に生起する事態は、ル形では表せずテイル形を用いる。(6)では「食べる」「沸く」とル形を使うと直近の未来の意味になってしまい、今ここで生起する事態は表せない。

(6) a. 彼は今、納豆を { ??食べる。 / 食べている。}

b. あ、お湯が沸く！ (直近の未来) / あ、お湯が沸いている。

このようにル形が今この事態を表せないことについては、ルが事態を外からひとまとまりとして捉えた述べ方なのに対して、テイルは事態の内側から見る、事象の内部の様態に関心を払う述べ方であるからだと言明される。⁴⁾ 樋口・大橋 (2004) は次のように言っている。

通常の場合、日本語では一回の実際に生じた動作の全体というのは、英語の場合と同じく終わってからしか認識できないので、タ形で表現される。認知主体の視点のある時点と同時に起きる一回の動作を表すには、英語で単純現在形が使えないのと同じく、日本語でもル形は使えない。動作が現在生じていることを表すには英語では *He's running* のように進行形を採るのと同様、日本語でも、「彼は走っている」のようにテイル形になる必要がある。(樋口・大橋 2004, p.126)

しかし、発話現時の事態であってもル形で表されることがある。(7)のような身体感覚を表す場合、および実況中継の場合である。

(7) a. 目が回る！

b. あーもう、イライラする！

c. バッター打ってショートゴロ。ショート取って一塁に送ります。

目が回る、イライラしているという事態はまさに今進行中であり、テイルが使われるはずであるが、ルが使われている。実況中継も今この瞬間を表すが、ルが使われる。

のみならず、(7)、(8)では今ここを表すのにふさわしいはずのテイルを使うと容認度が下がる。(8a)、(8b)は自分の身体感覚であるのに他人事のような感じを受ける。これはどのように考えればよいのか。

(8) a. ??目が回っている。(cf. あいつ、目、回ってるよ。)

b. ??あーもう、イライラしてる！(cf. (子供が) ママ、イライラしてる…)

c. (実況中継で)⁵⁾

バッター打ってショートゴロ。ショート取って一塁に {送ります。 / ??送っています。}

柳沢 (1995, p.210) は「(テイルは) 言表に現れない捨象された情報が存在することを示す」として
いる。(9)のように、カッコ内の情報が何らかの方法で聞き手にも伝わるか、または既に聞き手が了解
していると、テイルが適切になる。

(9) a. (冷静になって他人の目で見てみると) ああ、イライラしているな。

b. (バッター走りますが) ショート取って一塁に送っています。

c. (VTR で見てみますと) 走者一塁を {踏んでいます。 / ?踏みます。}

このことから、テイルは単に事態を述べるだけではなく、他の情報を考慮に入れつつ、その要素と
関連付けながら、事態を述べるものだと考えることができる。言表される、知覚によって得た情報、
すなわち当該の事態に加え、その事態を他の情報と関連付けるという知的作業を経ることになる。(8a)、
(8b)の他人事のような感じ、客観的な印象は、この一過程が加わることによるものと考えられる。

これに対しルは、他を考慮に入れず、知覚で得る情報、すなわち事態そのものだけを述べるもので
ある。文が述べる範囲は話者が知覚している範囲のみに狭く限定されている。身体感覚の表現や実況
中継の場合、この知覚の範囲は、自らの身体、ボールやプレーヤーの周りのみである。⁶⁾ 知覚の範囲
に生起する一個の事態のみを述べるため、ルは、(7)のような文脈で適切となる。話者の視界全部を覆
っている当該の事態を、他の要素を考慮に入れずに述べる時、発話現時の知覚はル形で表される
ということができる。⁷⁾

さて、テイルにおいては、言表された事態と、併せて考慮すべき情報の総合が、ある全体を形成す
る。文はこの全体と照らし合わせて解釈されることになる。この範囲は Recanati (1996) で domain of
discourse と呼ばれているものである。

So we see that utterances, like quantifier phrases, are interpreted relative to some partial, contextually determined *domain of discourse* rather than to a fixed, total world. (Recanati1996, p.446 強調 筆者)

(10) は「今までに昼ご飯を食べたことがある」という、全世界全時間を考慮に入れた解釈はされず、考慮の範囲を今日に限った解釈がされる。話者はこの文が成立する範囲を「今日」に限っている。この範囲が *domain of discourse* である。この範囲は聞き手も了解しており、「今日のお昼を食べた」という正しい解釈が取られる。*domain of discourse* (以下では「領域」と略記する) とは、文解釈時に考慮に入れるべき範囲であり、文が成立する範囲、文がそこで真となる範囲といえる。

(10) J'ai déjeuné (aujourd'hui). 「(今日)お昼ご飯を食べた」

ルとテイルは、解釈時に考慮に入れるべき範囲、すなわち領域が異なる。ルは先に見たように事態そのものを述べるものであり、一個の事態しか含まれない領域で解釈される。テイルの場合、領域は言表された事態と、既に発話当事者が共有している情報の、両方を含む全体で構成される。⁸⁾ (9b)はボールの行方と走者の両方を考慮に入れた領域内で解釈され、「バッターはアウトになる」と理解される。テイルは既に共有している他の要素を含む全体の中の一つとして事態を表すといえることができる。図1は、ル、テイル、それぞれの領域を図示したものである。

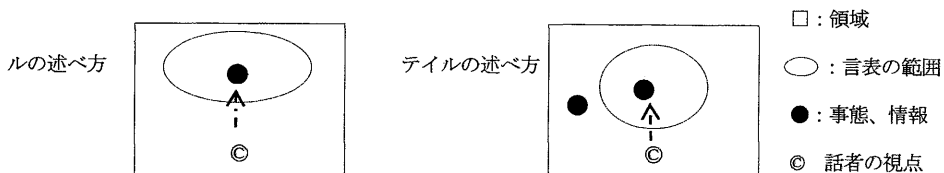


図1

3. 過去時のテイル

過去時の事態は普通タ形が表すが、テイルが表すこともある。この場合のテイルも、全体の中の一つとして事態を述べるという点では変わらない。(11a)は事件を構成する要素の一つとして「400万円を渡した」ということが述べられており、(11b)は建物全体を特徴づける事象の一つとして理解される。これに対しタの文は単独で解釈され、事態の成立のみが伝達される。

(11) a. 必ず儲かるなどと持ち掛けられ、被害者は400万円の現金を手渡しています。

b. 母屋の大部分が江戸時代に建てられている。

(12) a. 被害者は400万円の現金を手渡しました。

b. 母屋の大部分が江戸時代に建てられた。

このようなテイルを仮に過去時テイルと呼ぶと、過去時テイルの領域も、図1で見たテイルの領域同様、二つ以上の情報からなる全体である。ただ過去時テイルの場合、領域内には生起時点の異なる事態が同時に含まれており、これによって、ある一時空の状況を表す時の時間性は無くなる。

この領域全体を示唆するのがテイルの述べ方であると考えられることができる。(9b)は全体として「残念だがアウトになる」ということを伝達するための文であり、また(11a)も現金を手渡したことだけを言いたいのではなく、それを含む事件の概要を伝える目的で発せられる。事態の成立のみをいうタでは、このように全体の共有を踏まえつつ事態を述べることはできない。

ここまでの考察から、(5)のタとテイルの違いが説明できる。タ形の「二ヶ月後にサイモン・クロードは亡くなりました」は、過去の事態「サイモンの死」のみを述べる。これに対し、テイルの「二ヶ月後にサイモン・クロードは亡くなっています」は、遺言状を巡る一連の話全体の中の一部として、事態「サイモンの死」を述べるものである。⁹⁾

4. 半過去：既に了解されている領域の一部を述べる。

4-1 状況 t_n の情報を共有する半過去

過去時テイルは事態を述べるのみならず、その事態が全体の一部をなすことも表し得るが、これと同様の「他の事象（を含めた全体）を鑑みた述べ方」という説明が、フランス語の半過去についてもなされることがある。複合過去は単純過去同様、過去の事態を述べるのみなので、(13a)は雨降りの事実がありさえすれば可能である。ところが半過去は事実があるだけでは使うことができない。

(13) (雨に濡れた舗道を見て)

a. *Tiens, il a plu* (複合過去)! 「降ったのね!」

b. *#Il pleuvait* (半過去). 「降っていた」 (Tasmowski De Ryck et Veters1996)

Tasmowski De Ryck et Veters (1996)は、話者と聞き手が共有している状況 t_n がなければ、半過去(13b)は使えないとしている。(14)のように状況 t_n を聞き手と共有していれば、半過去を使うことができる。

(14) (午前中に大雨が降った時、一緒に雨宿りした人に夜の会合でまた会って)

Qu'est-ce qu'il pleuvait, n'est-ce pas? (Tasmowski De Ryck et Veters1996)

このことから、半過去も、既に共有されている情報を鑑みて述べる方法であると考えられることができる。

最も一般的な用法(ex. *Quand il est parti, il pleuvait*)では、半過去は、複合過去もしくは単純過去が導入する過去時の状況 t_n を描写する事態を示す。このとき状況 t_n は聞き手に既に了解されている。

また半過去が、あたかも既に共有している情報のように事態を提示することもある。(15)では、単純過去 *siffla* が導入する状況 t_n に事態「到着」を半過去で置くことによって、「(はっと気が付くと) 駅に着いたのだ」というニュアンスになる。(15) のような用法は「領域 (状況 t_n) には、前から半過去の表す事態があったものとせよ」という指令であると考えられる。⁷⁾

(15) *Le train siffla (t_n) longuement. On arrivait à la gare.*

半過去は、言表する事態と、併せて考慮に入れるべき情報からなる全体、即ち領域を示唆する。上に挙げた用法ではいずれも、領域である状況 t_n は既に了解されている。だが単純過去などで予め状況を設定せず、いきなり半過去を使うこともある。これによって、領域となる状況が共有されていなくとも、あたかも既に共有しているかのように表すことになる。

(2)で見た INar はこのようなものだと考えることができる。新たに事態を導入し、その都度、物語世界を順次構築するのではなく、事態の生起する状況に突然気が付いたように描き出す。これにより(2)の半過去の文には「一週間後、妻があっけなく死んでしまった(という状況になった)」、「(気づくと) スポットライトの中にベティが横たわっていた」ということが含意されるようになる。

(16)(=2) a. *Huit jours plus tard, elle mourait d'une fluxion de poitrine.*

b. *Elle y était à peine installée [...] qu'un projecteur éclairait la pièce où s'élançait Betty Bruce.*

これらの半過去は、状況の中に視点を置いた知覚の表現である。これは、事態の生起時点に、その視点の持ち主である主体を想定しているということである。INar の「錆びたカメラで撮ったような」という意味効果は、順当に構築された状況ではなく、いきなりの半過去の使用で作り出される状況に置かれた主体が知覚する、ごちない、はっと気づくような様態を指し示すものと考えられる。

4-2. ある全体の中の一部を表す半過去

前段で見た半過去は、INar も含めて、どれも一時点の状況 t_n を領域としている。だが複数の時点と同時に含む領域で解釈される半過去もある。

(17) *L'année dernière, je déménageais.*

(18) - « Vous avez vu l'incendie ? »

- « Oui ! Le feu *sortait* de ce bâtiment-là ! »

(19) Vingt ans plus tard, Guillaume *disait* différemment la même chose [...] (Berthonneau et Kleiber 1999)

(17)は *Qu'est-ce que vous avez fait l'année dernière ?* という問いの答としては不適切だが *Pourquoi vous n'avez rien écrit l'année dernière ?* の答としては適切である。前者の問いが生起した事態を要求するのと異なり、後者は、引越しの一時だけではなく、「去年」全体がどのような性質であったのかを問うもので、他の事態も含む(17)の半過去の領域全体が「去年は忙しかった」と伝えるからである。

(18)のように証言に使われるものも同様に、全体の中の一部を表す半過去だと考えられる。問われている「火災」は、建物が燃えることや怪我人が出るなどの色々な出来事の総体だが、それを構成する一つの要素として「その建物から火が出た」ことを述べている。

(19)は、事実を提示するにとどまらず、20年前のもう一つの著作との関連において、Guillaume が言ったということを述べている。この文の領域は、生起時点に20年の差のある二つの事態を同時に含んでおり、この領域で二つの事態を鑑みて解釈されることで、Guillaume の考えの一貫性が伝達される。

(1a)は、これら(17)–(19)と同様、全体の中の一要素として解釈される半過去であると考えられる。

20) (=1a.) Je me rappelai alors avoir laissé le testament sur mon bureau. Je le pris, scellai l'enveloppe, écrivis ce qu'il fallait dessus et la déposai dans mon coffre. *J'en arrive maintenant au point crucial de mon histoire. Deux mois plus tard, Simon Clode mourait. Je ne m'étendrai pas outre mesure, je m'en tiendrai aux faits : quand on ouvrit l'enveloppe scellée, elle ne contenait plus qu'une feuille de papier blanc.*

冒頭で見たように、(1a)の半過去は INar と異なり、エピソードの最後の要素ではない。続きがあることを直後の文で語り手が明示している。また直前の文で、同じく語り手によって「ここからが話のかんじん要」であると告げられており、聞き手はいくつかの出来事がある全体「かんじん要なところ」を形成することを知っている。半過去 *Simon Clode mourait* はその一要素として解釈され、「開けると白紙しか入っていなかった」という事態のいわば前日譚のような位置づけとなる。

また問題の半過去の前後に現れる多くの *je* や *mon* 等は、登場人物としての *je* ではなく、すべて語り手を指示している。語り手なのだから当然話の全容を把握しているのだが、特にこの部分は話全体を俯瞰する主体としての語り手が顕在化され、文はこの視座から事態を捉えたものとなっている。

この視野の広さが、INar 等の前段で見た半過去と最も違う点である。INar は状況 t_n に身を置く主体の知覚を表し、時間的・空間的に状況 t_n を超えた範囲のことは語らない。一方、複数の事態を同時に考慮に入れる述べ方では、全体の中で、当該の事態がどのような位置づけにあるかを評価することが可能になる。(1a)が表す事態が話の中でどのような位置を占めるのかが、直前と直後の文で述べられて

いることから、(1a)が全体の中の一部を指す半過去であることが確認できる。

5. 終わりに

テイルと同様、半過去は解釈の領域全体を示唆する述べ方である。INar の場合は状況 t_n が領域である。この領域は予め共有されているべきだが、そうではないため、受け手は INar の出現と同時に作り出された「知っているはずの状況」に当該の事態を置くことを余儀なくされる。

(1a)は、過去時を表すテイル同様、領域内にある、他の時点に起きた他の事象を鑑みて、事態を述べるものである。聞き手は、解釈時に併せて考慮すべき情報があることを知っており、話の重要な部分の、「サイモンの死」以外の事柄を待つことになる。単純過去で述べると、このような効果は得られない。夕に置かれた(1c)の日本語訳のように、単純に事実が提示されるのみである。

21) Je le pris, scellai l'enveloppe, écrivis ce qu'il fallait dessus et la déposai dans mon coffre. Deux mois plus tard, Simon Clode mourut.

結論として、(1a)は、領域「話全体」の共有を確認しつつ、その一要素として事態を述べる半過去であると言える。

本稿では「どこまでを考慮に入れ解釈するか」という領域の考え方から、事態を述べるだけではなく、他の事象を合わせた全体の中の一つとして、事態を提示する述べ方があることを見た。そして、日本語のテイル、(1a)のようなフランス語の半過去がこの述べ方を表し得ることを見た。テイルの一般的な用法とされているアスペクト用法とこの述べ方がどのような関係にあるのか、また半過去の一般的な用法との関わりもより明確に示す必要があるが、今後の課題としたい。

註

- 1) 本稿では、「切断の半過去」*imparfait de rupture*、「結末の半過去」*imparfait conclusif*、「絵画的半過去」*imparfait pittoresque*などを共通の性質をもつものと捉え、*Imparfait narratif*と総称する。(—on trouve en effet, aux côtés d'*imparfait narratif*, les termes : *imparfait de rupture*, *pittoresque*, *impressionniste*, *perspectif*, *aoristique*, etc. —(Bres1999, p.5))
- 2) これらの特徴に加え、Lebeau(2005)は、⑤状態動詞の場合、始動相を表す、⑥時の副詞はないこともあるということを挙げている。
- 3) 結論を先取ると、(1c)の日本語訳の夕は、過去の事態であることのみを表し、原文の単純過去に忠実な訳である。対してテイルを用いると「他の事象もある中での一事象」という捉え方が明らかになる。フランス語訳(1a)は、原文の英語では表現し得ず従って表現されていない、この捉え方を表したものである。
- 4) 町田(1989)、工藤(1995)他
- 5) 「スポーツ中継においては、テイル形が排除される」(柳沢 1995, p.208)
- 6) 経験者が話者以外の場合、ルでは身体感覚を表わし得ず、テイルが用いられるのも、本稿の主張を傍証すると考えられる。他者の感覚を述べる場合には、当該の感覚に加え、その経験主体の存在との関連付け

が必要になるからである。この場合、身体感覚そのものではなく、観察からの判断の表現になる（目が回る！/（あの様子では彼は）目が回っている）。また、実況中継について、柳沢(1995)では次の指摘がされている。「ル形やタ形による表現では、他の一切が無視され、力士や野球選手だけが注目されるのに対して、テイル形では、土俵やグラウンドを広く見回した表現となってしまう。テイル形は言及されていない部分にまで広く目を向けた表現を作るため、対象との間に距離を感じさせ、発見した時の感動、あるいは実況の迫力を薄めてしまうのである。」(柳沢 1995, p. 209)

- 7) 「走者が塁を踏む」という事態だけでなく、その結果セーフと判定されるなど、その事態をもとに解釈する、他の事象と合わせて考慮するなどの作業が加わると、(9c)で見ると、ルは容認度が下がる。
- 8) このことは状況描写のテイルとも矛盾しない。状況描写では、話者＝知覚主体の視点が聞き手にも了解されている。状況の了解なく、事態のみをいきなり述べる場合には「車が来る！」とルが、他の情報も併せて解釈する場合には「(君は道に出ようとするが) 車が来ている」とテイルが用いられる。
- 9) ここで過去時テイルと呼んでいるものは、井上(2001)で「過去の用法のシテイル」と同様である。
- 10) ル形の「二ヶ月後にサイモン・クロードは亡くなります。」は、事態のみを述べるもので、時間的位置をせず、また、テイルのような「他の情報を鑑みて、全体の中で解釈せよ」との指令も含まないと考えるが、ここではこれ以上立ち入らない。
- 11) (15)のような用法は「説明の半過去」と呼ばれることがある。

参考文献

- Bres, J. 1999, *Présentation. Cahiers de praxématique* 32, 3-11
- Berthonneau A-M. et G. Kleiber. 1999, « Pour une réanalyse de l'imparfait de rupture dans le cadre de l'hypothèse anaphorique méronomique », *Cahiers de praxématique* 32, 119-166
- De Vogüé S. 1999, « L'imparfait aoristique, ni mutant, ni commutant », *Cahiers de praxématique* 32, 43-69.
- Lebeau E. 2005, « Mon nom est narratif : imparfait narratif », *Cahiers Chronos* 14, 79-102
- Le Goffic P. 1995, « La double incomplétude de l'imparfait », *Modèles linguistiques*, 31, 133-148
- Recanati F. 1996, "Domain of Discourse", *Linguistics and Philosophy*, 19, 445-475
- Tasmowski De Ryck L. 1985, « L'imparfait avec et sans rupture », *Langue française*, 67, 59-77
- Tasmowski De Ryck L. et C. Vettors, 1996, « Morphèmes temporels et déterminants », *Cahiers Chronos*, 1, 125-146.
- Vettors C. 1996, *Temps, aspect et narration*, Amsterdam-Atlanta, Rodopi.
- 井上優 2001 「現代日本語の「タ」』『「た」の言語学」 97-163 ひつじ書房
- 岸彩子 2011 「ル/テイル 発話現在と語りの現在」 国際セミナー「日本語とフランス語：対照言語学的アプローチ」於名古屋大学 2011年5月14日 口頭発表
- 工藤真由美 1995 『アスペクト・テンス体系とテキスト』 ひつじ書房
- 東郷雄二 2012 「時制と談話構造—同時性を表さない半過去再考」 *フランス語学研究* 46 51-68
- 東郷雄二 2017 「言葉とココロ 言語の目に見えない面についての2・3のこと」東郷雄二先生最終講義 2017年3月7日 於京都大学 ハンドアウト
- 春木仁孝 2000 「J'ai rencontré un réfugié qui arrivait du Kosovo. —半過去の属性付与と機能について—」 *フランス語フランス文学研究* 77 84-95
- 樋口万里子・大橋治 2004 「節を超えて：思考を紡ぐ情報構造」大堀壽夫(編)『認知コミュニケーション論』 55-99 大修館書店
- 町田健 1989 『日本語の時制とアスペクト』 アルク
- 柳沢浩哉 1995 「テイル形の非アスペクト的意味(2)」 *人文科教育研究* 22 207-214
- 渡邊淳也 2014 『フランス語の時制とモダリティ』 早美出版社

用例出典

- Christie, Agatha, 2002, *The Thirteen Problems*, Harper Collins
- Christie, Agatha, 2009, *Miss Marple au club du mardi*, Le Livre de poche, traduit par Durastanti
- クリスティ A., 2015 『ミスマーブルと13の謎』創元推理文庫 高見沢潤子訳
- Maupassant, Guy de., 1974, *Les Bijoux dans Contes et nouvelles*, Éditions Gallimard
- Simenon, Georges., 1999 *Maigret au Picratt's*, Le Livre de poche